

基礎的事項の習得に効果的な教育方法の検討と授業評価

下田 健治¹, 車 圭子²

Study of Effective Educational Method in the Basic Knowledge and Evaluation of Lessons by Students

Kenji SHIMODA¹ and Keiko KURUMA²

キーワード：聴講ノート方式, 授業評価, 要点概説方式, シンポジウム方式

概 要

聴講ノート方式の講義を行い, それに対する学生による授業評価および試験の成績について検討した. 聴講ノート方式に対して学生の満足度は全般的に高く, 大半の学生はこの教育方法を好意的にとらえていた. 聴講ノート方式の教育効果を検討するため通常講義の成績と比較したところ, 聴講ノート方式で低得点者の割合が減少し, 高得点者では増加がみられた. このことから聴講ノート方式は, 初心者が基礎的事項を身につける方法として有用であることがわかった. これからの教育は知識を使いこなし発展させる形, いわゆる討論形式の授業を教育の中にどのように組み込むかが大切である. したがって基本的知識を獲得できる聴講ノート方式と, 論理的思考能力および伝達表現能力などを高めるシンポジウム方式とを組み合わせた教育方法が望ましい.

はじめに

情報技術の進歩が著しい時代にあっても講義は大学における主要な教育方法の一つである. 近年, 情報技術を駆使した教育が盛んになり, プレゼンテーション技術によってあたかも教育効果が増大したかのように見える. しかし教育関連の情報機器がいかに開発, 導入されようとも, 教育の基本として忘れてはならないのは教壇から学生に語りかける講義である. それは教育はあくまでも人間中心の行為であり, 教師という仕事対人サービスであるかぎり, 人と人との係わり合いを大切にすることなしに成り立たないからである.

今や少人数での情報機器を用いた教育が主流となりつつあり, 多人数に対する従来型の講義の評判は芳しくない. しかし講義は知識を伝達するのに簡便でしかも効率がよく, 最も優れた方法の一つである. ただ講義で危惧されることは一方通行の劇場型講義ではその

教育効果は惨憺たるものになるということである.

本学においても教育の中で講義の占める割合はかなりなものである. 著者らは, 教授法の基本である講義を効果的なものにすることが教育を良くする一つの手立てであるとの考えから, ぼんやりしていたり, 眠っていたりして講義時間を無駄に過ごしている学生を少なくし, 授業に意欲的に参加できるような方法の導入の必要性を感じた. そこで考えたのが通常講義に加えてノートを取りながら講義を聴くという従来から行われている当然といえば当然の方法の吟味である. この聴講ノート方式に対する学生の授業評価を行うと同時に, シンポジウム方式, 通常講義, 要点概説方式などと試験の成績を比較検討し, より良い講義方法を模索した.

検討方法

1. 対象学生および対象科目：臨床検査科1年生59名の学生を対象とした. 科目は病因・生体防御検査学の微生物学領域とし, 1年次後期に90分の講義を9コマ行った.
2. 聴講ノート方式講義(以下聴講ノート方式)の進め方：教科書(臨床検査微生物学 下田健治他著 西日本法規出版)に沿って約60分講義し, 最後の10

(平成13年9月6日受理)

¹川崎医療短期大学 臨床検査科, ²財団法人 岡山県健康づくり財団 保健部 臨床検査課

¹Department of Medical Technology, Kawasaki College of Allied Health Professions

²Medical Technology Section, Department of Health, Okayama Health Foundation

分でその日のまとめを行った。学生にはノートの左側のページに受講記録をとり、右側ページは帰宅後の自己学習用として、さらに2年次での講義、実習の時の余白として用い、何年かをかけて良いノートを作るように指示した。聴講ノートは、講義終了直後に毎回提出させ、聴講記録を大まかに点検し、翌朝返却した。次回の提出時、自己学習の有無を確認した。

3. 成績評価：聴講ノート（配点30点）と筆記試験（配点70点）で行った。筆記試験は、聴講ノートを中心として出題することを第1回目の授業時に知らせた。
4. 学生の受講前知識調査：受講する学生の知識レベルがどの程度かを事前に知るため1回目の授業のときに微生物学および臨床微生物学の必須用語50個を出題し、無記名で調査した。質問の主なものは、「グラム染色、グラム陽性菌、院内感染、分離培地、嫌気培養、黄色ブドウ球菌、大腸菌」などの50の用語で、それぞれについて「知っていますか」と質問し、「1. まったく知らない。2. 1, 2回聞いたことがある。3. 名前も内容も知っている」のいずれかに答えるものである。
5. 授業評価：学生による授業評価の主要なフォームとされている京大式フォームA, Cおよび放送教育開発センター（現国立メディア教育開発センター）フォーム¹⁾を基本とし、数項目については文章の一部を変えて無記名でアンケートを行った。
- 1) 京大式フォームA（表1）：インベントリー方式と呼ばれるもので講義や演習のあり方について10ない

し15の項目を設定して何段階かで評定を求めるものである。著者らは質問の内容によって受講印象評価、学習雰囲気評価に分類した。

受講印象評価項目は、「(1)面白くて退屈しなかった、(2)違和感があり、ついて行けなかった、(3)自分なりに考えてみるきっかけになった、(4)よく分からなかった、(5)先生の学問に魅力を感じた、(7)先生の人柄に魅力を感じた、(9)自分に役立つ内容だった、(10)出席してよかった」とした。学習雰囲気評価項目は、「(6)出席していた学生の態度がよくなかった、(8)一般的にざわざわとした雰囲気では集中できなかった」とした。

2) 京大式フォームC（表1）：講義について学生に自由に記述させた。

3) 放送教育開発センターフォーム（表2）：学生による授業評価のひとつとして提案され、今後多くの大学で活用される事が期待されているものである。著者らは質問の内容によって教育技法評価、教育内容・構成評価、学習意欲評価、総合評価の4つに分類した。

教育技法の評価項目は、「(1)講師の話し方が不明瞭である、(2)講師の話し方が面白くない、(3)講師の話がわかりにくい、(4)講義の進み方が速い、(5)講義の分量が多い、(10)講義の目的がはっきり明示されていた、(14)どこが重要なポイントであるかがよく分かった」とした。教育内容・構成の評価項目は、「(6)講義の内容が難しい、(7)講義の内容がつまらない、(8)講義の構成に工夫がない、(11)講義には改善の余地が多

表1 京大式フォームA・C（一部改変）

病因・生体防御検査学授業評価アンケートI

（京大フォームA）

A. この講義に出席したあなたの率直な印象を、次の項目に「はい」「わからない」「いいえ」のいずれかに○印をつけることによって答えてください。

① おもしろくて退屈しなかった。……………	「はい・わからない・いいえ」
② 違和感があり、ついて行けなかった。……………	「はい・わからない・いいえ」
③ 自分なりに考えてみるきっかけになった。……………	「はい・わからない・いいえ」
④ よく分からなかった。……………	「はい・わからない・いいえ」
⑤ 先生の学問に魅力を感じた。……………	「はい・わからない・いいえ」
⑥ 出席していた学生たちの態度がよくなかった。……………	「はい・わからない・いいえ」
⑦ 先生の人柄に魅力を感じた。……………	「はい・わからない・いいえ」
⑧ 一般的にざわざわとした雰囲気では集中できなかった。……………	「はい・わからない・いいえ」
⑨ 自分に役立つ内容だった。……………	「はい・わからない・いいえ」
⑩ 出席してよかった。……………	「はい・わからない・いいえ」

（京大フォームC）

B. この講義に出席したあなたの率直な印象について、以下に自由に書いてみてください。（裏も可）

表2 放送教育開発センターフォーム（一部改変）

病因・生体防御検査学授業評価アンケートII

放送教育開発センターフォーム

この講義に関して、あなた自身は、下記の印象・意見のそれぞれに対してどの程度あてはまると
 思いますか。4段階で評定してください。

質問項目	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
1) 講師の話し方が不明瞭である	1	2	3	4
2) 講師の話し方が面白くない	1	2	3	4
3) 講師の話がわかりにくい	1	2	3	4
4) 講義の進み方が速い	1	2	3	4
5) 講義の分量が多い	1	2	3	4
6) 講義の内容が難しい	1	2	3	4
7) 講義の内容がつまらない	1	2	3	4
8) 講義の構成に工夫がない	1	2	3	4
9) 講義には総合的に満足である	1	2	3	4
10) 講義の目的がはっきり明示されていた	1	2	3	4
11) 講義には改善の余地が多かった	1	2	3	4
12) 新たな発見があった	1	2	3	4
13) 講義を通してやったという達成感がある	1	2	3	4
14) どこが重要なポイントであるかがよくわかった	1	2	3	4
15) 講義から十分な知的刺激を受けた	1	2	3	4
16) 講義は全体的に見て自分にとって価値があった	1	2	3	4
17) 講義に集中できなかった	1	2	3	4
18) 学習が自分なりに順調に進んだ	1	2	3	4
19) 関心をひいた事柄はより深く調べるよう心がけた	1	2	3	4
20) 講師の熱意が感じられた	1	2	3	4
21) 一層学習意欲が高まった	1	2	3	4
22) 講義聴講ノートの作成はよい学習方法である	1	2	3	4
23) 聴講ノートの評価の1つとして用いるのはよい	1	2	3	4

かった、(22)聴講ノートの作成はよい学習法である、(23)聴講ノートの評価の1つとして用いるのはよい」とした。学習意欲の評価項目は、「(18)学習が自分なりに進んだ、(19)関心をひいた事柄はより深く調べるように心がけた、(21)一層学習意欲が高まった、(17)講義に集中できなかった」とした。総合評価の項目は、「(9)講義には総合的に満足である、(12)新たな発見があった、(13)講義を通してやったという達成感がある、(15)講義から十分な知的刺激を受けた、(16)講義は全体的に見て自分にとって価値があった、(20)講師の熱意が感じられた」とした。

6. 教育方法の違いによる成績の検討

1) 聴講ノート方式の成績の比較検討：聴講ノート方の教育効果を見るため定期試験と同時に通常講義と

同じ内容の試験を行い、成績分布の差異について検討した。

2) 教育方法の違いによる成績の比較検討：医動物学の教育において講義なし要点概説方式（以下要点概説方式）、講義なしシンポジウム方式（以下シンポジウム方式）などの教育方法と通常講義での成績分布について比較検討した。要点概説方式とは、通常の講義はせずに学生に教科書の学習範囲を指定し、約2時間自己学習させ、授業時間の最後の30分で要点を概説する授業である。一方、通常講義とは、授業時間のすべてを教科書にそって行う方法である。シンポジウム方式^{4),5)}とは、通常の講義は行わず、教員が指定したテーマについて自己学習し、「寄生虫シンポジウム」という会で口頭発表する方法である。

結 果

1. 受講前知識について

「まったく知らない」と答えた全体の平均項目数は34で、大半の学生が70%近い用語を知らなかった。「名前も内容もよく知っている」、「1, 2回は聞いたことがある」とした平均項目数はそれぞれ3.9, 12であった。質問数の半分にあたる25項目以上を「まったく知らない」と答えた学生は83%に上り、「よく知っている」と答えた項目が10以上の人は9%にすぎなかった。知らないという項目が最も多かった学生は43に上り、最もよく知っていた学生の項目数は26であった。

2. 学生による授業評価

1) 京大式フォームAによる授業評価

(1) 受講印象評価 (図1)

受講印象に関する項目では、「おもしろくて退屈しなかった47.4%、違和感があり、ついて行けなかった3.4%、自分なりに考えてみるきっかけになった69.5%、よく分からなかった8.5%、先生の学問に魅力を感じた61%、先生の人柄に魅力を感じた59.3%、自分に役立つ内容だった78%、出席してよかった99.6%」という結果ではほぼ全員が出席してよかったと思ひ、教師の学問や人柄に約60%が魅力を感じたと答えていた。少数ではあるがよく分からなかったと答えた学生が見られた。

(2) 学習雰囲気評価

学習雰囲気に関する項目では、「出席していた学生の態度がよくなかった3.4%、全般的にざわざわとした雰囲気の中で集中できなかった1.7%」という結果で学習環境

はかなり良かったとしていたが、数名の学生は低く評価していた。

2) 京大式フォームCによる授業評価 (自由記述)

学生59名の88.1%にあたる52名が授業に対してなんらかの意見を書いていた。その意見の主なものは「この講義は他の講義と違って聴いていて楽しく、全然退屈せず、眠くならなかった。ポイントが分かりやすい講義で聴講ノート方式はあとで勉強するのに良い方法だと思う。これまでの講義はどちらかというと受身的だったが、この授業は集中することができ、能動的になれたと思う。講師の教育に対する熱意を感じ、考え方や人柄など、惹かれる部分がたくさんあった。時間通り始まり、必ず時間内に終わることはすごかった。ノートを書くのが忙しくてもう少しゆっくり進めてほしかった。聴講ノートの作成には苦勞した。覚えることが多すぎて、自分なりにまとめられるかどうか不安だ。難しく、理解しにくく先生の話についていけなかった。」などで講義そのものや聴講ノート方式は高く評価するもののノート作成の苦勞や学業への不安を訴えるものも散見された。アンケートの結果から全体として、ぼんやりしていたり、眠っていたりして講義時間を無駄に過ごしている学生は少ないと思われた。

3) 放送教育開発センターフォームによる授業評価:

「あてはまる、ややあてはまる」と答えた人の合計の割合を示した。

(1) 教育技法評価 (図2)

教育技法に関する項目は、「講義の目的がはっきり明示されていた91.3%、どこが重要なポイントであるか

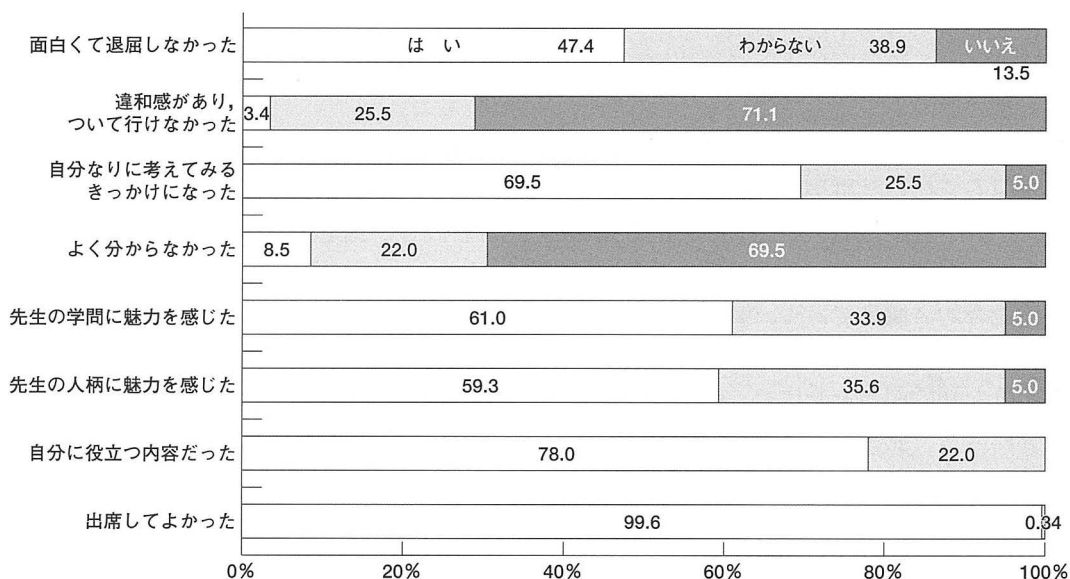


図1 受講印象評価

がよく分かった94.8%，講師の話し方が不明瞭である1.7%，講師の話し方が面白くない13.6%，講師の話がわかりにくい8.5%，講義の進み方が速い52.5%，講義の分量が多い49.2%という結果で、講義の目的や内容について分かりやすい説明であったが、講義の速度や講義量に対して改善の余地があるとの評価であった。

(2) 教育内容・構成評価 (図3)

教育内容・構成に関する項目は、「講義の内容が難しい50%，講義の内容がつまらない15.4%，講義の構成に工夫がない17%，講義には改善の余地が多かった23.9%，聴講ノートの作成はよい学習法である84.7%，聴講ノートの評価の1つとして用いるのはよい89.9%」という結果で聴講ノート方式は高く評価するものの講義内容が難しく、内容や授業に工夫が必要との意見がみられた。

(3) 学習意欲評価 (図4)

学習意欲に関する項目では、「学習が自分なりに順調に進んだ54.3%，関心をひいた事柄はより深く、調べるように心がけた57.7%，いっそう学習意欲が高まった68.9%，講義に集中できなかった13.6%」という結果でおおむね学習は順調に進んだようであるが、うまくいかなかった学生も少数みられた。

(4) 総合評価 (図5)

総合評価に関する項目では、「講義には総合的に満足である77.2%，新たな発見があった74.6%，講義を通してやったという達成感がある78%，講義から十分な知的刺激を受けた83.1%，講義は全体的に見て自分にとって価値があった91.5%，講師の熱意が感じられた98.4%」という結果で全般的に満足度、達成感、価値観などいずれも高い評価が得られた。

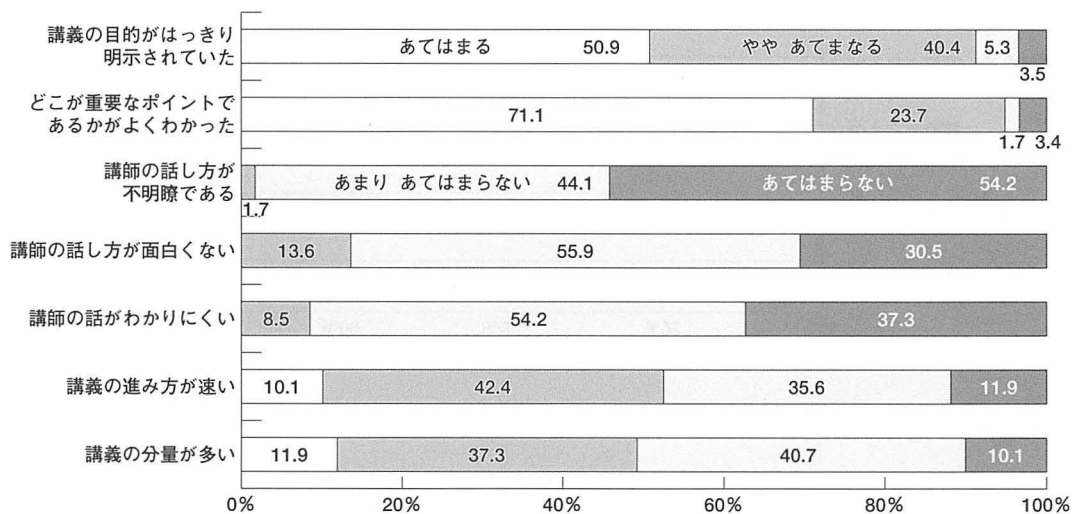


図2 教育技法評価

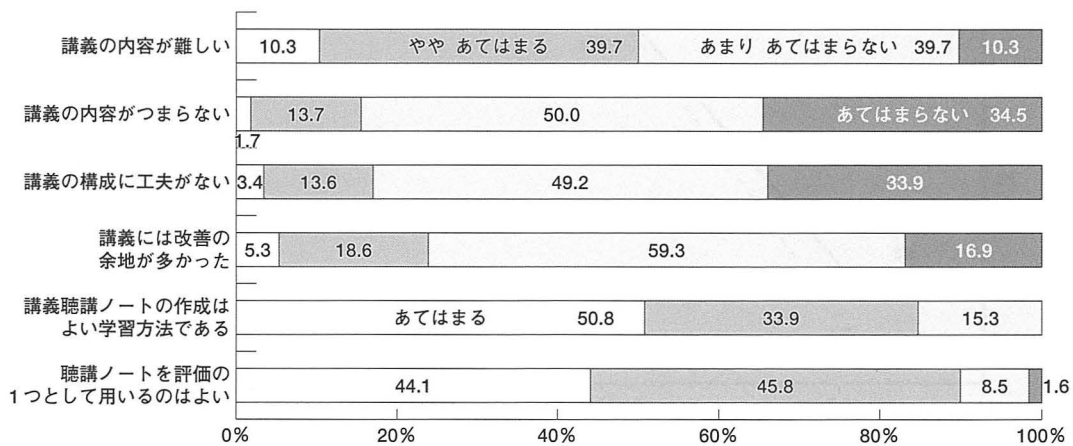


図3 教育内容・構成評価

3. 成績の比較検討

1) 聴講ノート方式と通常講義の成績比較 (図6)

聴講ノート方式では、39点以下の低得点者の割合が通常講義に比べて約半分で、80点以上の高得点者のそ

れは約2倍という結果であった。40点から59点までの中程度の得点者の割合にほとんど差はなかった。60点から79点までは、通常講義の方がやや多かった。

2) 要点概説方式, 通常講義, シンポジウム方式の成

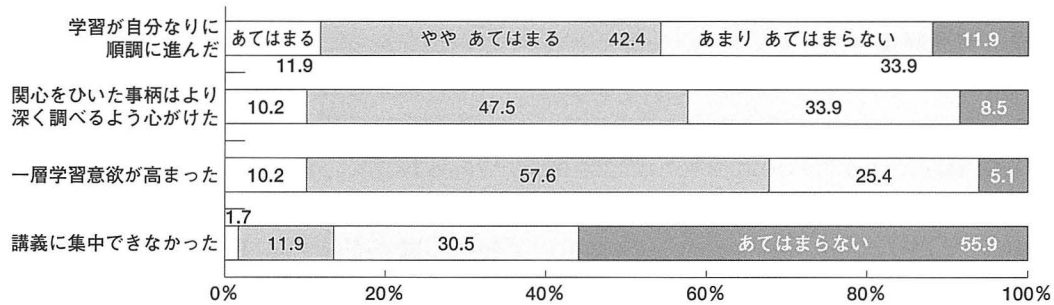


図4 学習意欲評価

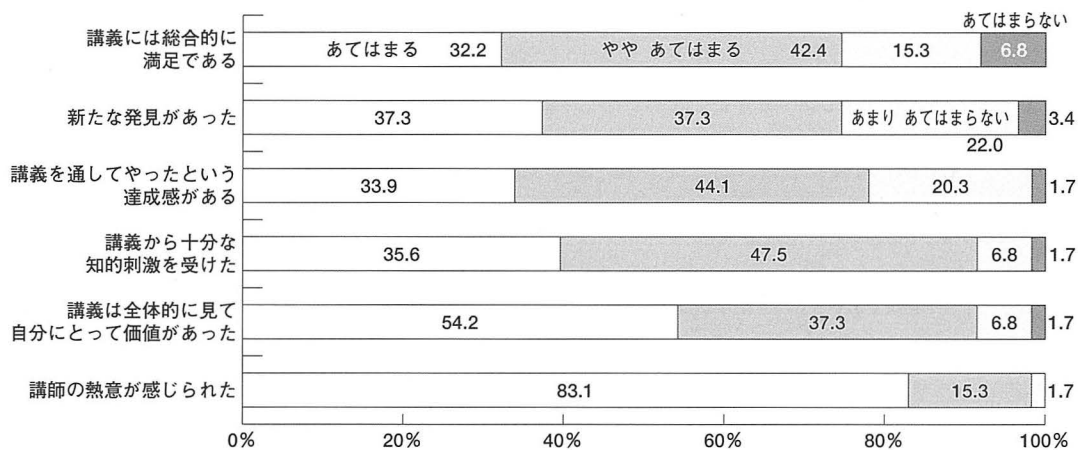


図5 総合評価

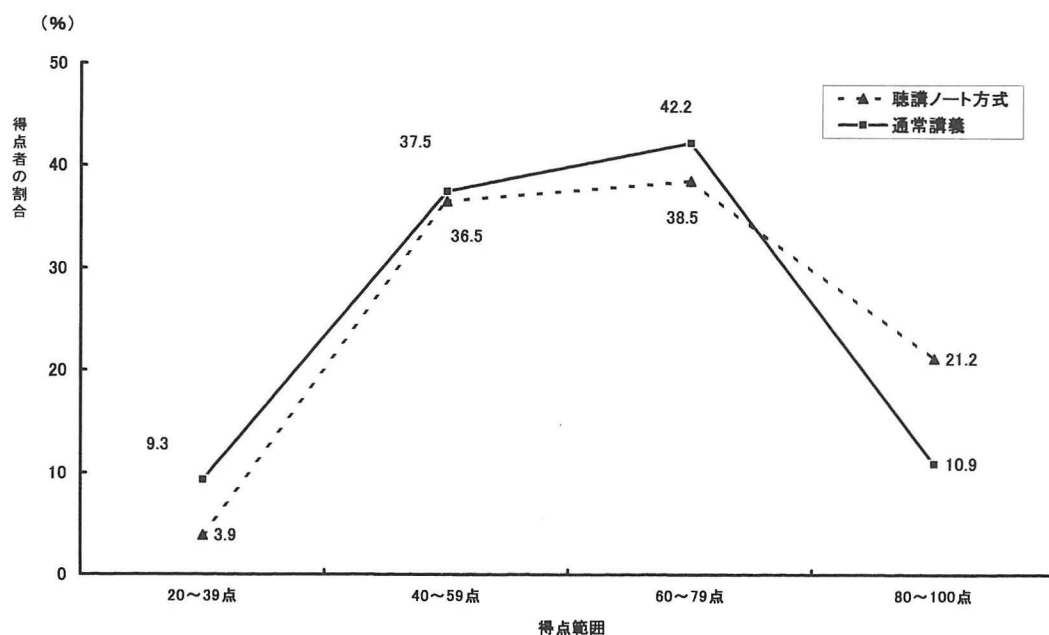


図6 聴講ノート方式と通常講義の成績比較

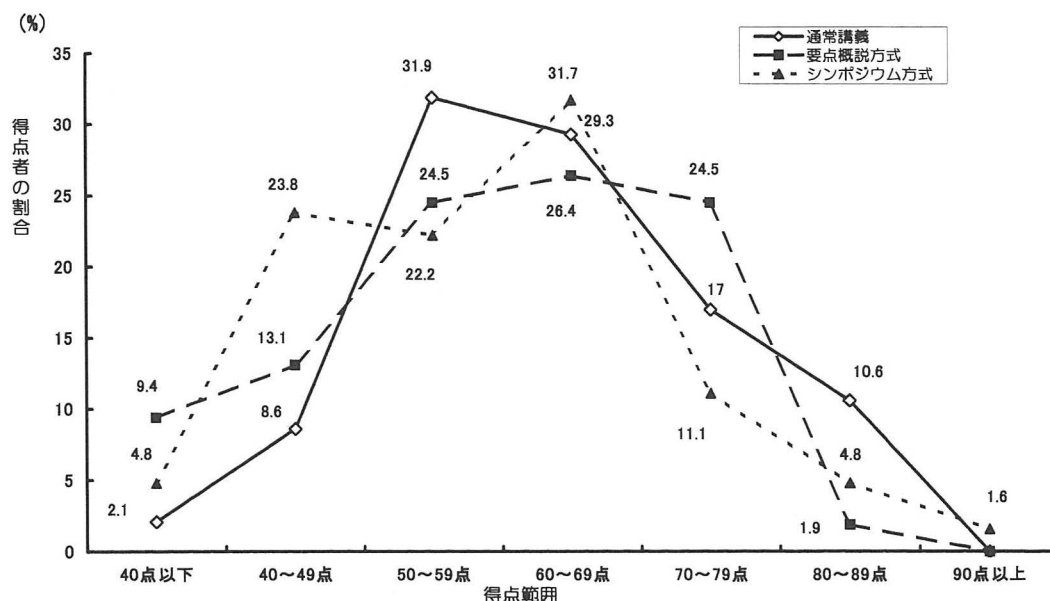


図7 要点概説方式, 通常講義, シンポジウム方式の成績比較

績比較 (図7)

低得点者の割合が最も多かったのは、要点概説方式の9.4%、次いでシンポジウム方式の4.8%、最も少なかったのは通常講義の2.1%であった。80点以上の高得点者の割合は通常講義が最も多く10.6%、次いでシンポジウム方式6.4%、少なかったのは要点概説方式の1.9%であった。49点以下の低得点者は、通常講義では10.7%と最も少なく、次いで要点概説方式の22.6%であった。シンポジウム方式では28.6%の学生が49点以下であった。60点以上の学生の割合は、通常講義57.4%、要点概説方式52.8%、シンポジウム方式49.2%であった。

考 察

学生による授業評価フォームは、今後の教育研究のことを考えて社会性があり信頼性の高いものを採用することが大切である。本来なら授業を始める前に準備し、その評価項目を念頭に教育活動をすべきだが、適当な様式が見つからず、講義期間の終わり近くにやっと決めることができた。したがって質問項目を意識することなく授業を進めることになった。採用した授業評価の質問項目は、著者にとって一つ一つが厳しい内容で、できれば用いたくないと思えるものであった。

教育(講義)を成功させる大きな要因の一つは、受講対象者の背景、特に講義に関する知識の程度を把握して適切に進めることである。そこで微生物学に関する知識がどの程度あるかを調べたところ83%の学生が

質問数の半分に当たる25項目以上を「まったく知らない」と答え、「よく知っている」とした人は9%にすぎなかった。このような状態では専門用語を多用した講義は適当でないと判断した。知らない項目が最も多かった学生は43項目に上り、知識レベルに個人差が大きいことも認識して講義をする必要があると思われた。

学生による授業評価は、FD(Faculty Development)活動の重要な柱である。その有用性については種々の意見があるが、学生による評価は、FDの手段として非常に効果があると考えている。その場合、画一的なものではなく、それぞれの学科、教員に見合った方法を創意工夫して進めることが大切である。

受講印象評価ではほぼ全学生が「出席してよかった」としていた。そして「役に立ち、勉強のきっかけとなった」、「講師の人柄や学問に魅力を感じた」などの項目に70~80%が肯定的な評価をし、教育においては講義内容とともに教師の人間性が評価に大きく影響すると思われる。学習雰囲気評価では、ほぼ全員が学習に集中でき他の学生の態度もよく、教室全体が適切な学習の雰囲気であったとしていた。これは受講印象評価で高い評価と関連しているものと考えられる。

自由記述というのはどのようなアンケートにおいてもなくてはならないものである。その中の意見には定型アンケートでは得られない極めて有用なものが少なくないからである。90%近い学生が意見を書いていたことは、この聴講ノート方式に対して前向きなことを示すものである。意見は賞賛的なものから改善要

請まで様々あり、いずれも講義に対してまじめな姿勢が感じられた。教師として誠意を持って対応することがいかに大切かを考えさせられ、同時に講義は人間修練の場であることを再認識した。

放送教育開発センターフォームによる教育技法評価では、講義の要ともいえる「講義の目的と重要なポイント」について90%以上の学生が目標のはっきりした講義であったと答えていた。この聴講ノート方式で教師に求められる基本的な教育技法は、わかりやすくメリハリがあり、学生たちが記録できる速さで話することである。一方では大半の人が講義内容を難しく感じていることから講義分量の調整と講義速度の問題とあわせて、補助プリントを用いるなどして分かりやすさを追求した授業を目指す必要がある。

教育内容・構成評価において聴講ノート作成の是非については、「聴講ノート方式は良い学習法であり、評価の一つとして妥当である」とした人が80%以上を占めていた。試験範囲を聴講ノートに限定したことやノートを平常点として評価の一つにしたことが多くの学生に支持された理由の一つかもしれない。講義内容を記録することについては色々な意見がある。「講義内容をノートに記録するという方法は、非能率的であるし、正確にノートをとれるかどうかとも疑わしい。いかに優れたノートでもこれを読みあげ、筆記させるだけという授業では、教授の最適化技法とは無縁であることを認識すべきである」²⁾とした考えもある。もっともな指摘である。しかしこの聴講ノート方式は、基本的な事柄についてほとんど知識のない人が学習を始めるときに、「考える素材としての知識」を確実に身に付けることのできる有効な方法と考えている。さらにノートを点検し、指導・評価することによって初心者にとって有効な教育援助の1つとなるに違いない。

学習意欲は、教育における動機づけとの関連からしても重要な質問項目である。今回の聴講ノート方式では、意欲が高まり、学習が順調に進み、参考書を用いて自己学習するという姿勢が50%以上の学生にみられ、知識の伝達だけに終わりがちな講義において能動的行動が起こる兆しがみられた。反面、講義に集中できなかったという学生が10%余りいたことは、講義分量・進行速度・難易度などがうまく噛み合わなかったことによるものと思われる。また意欲を持ってないと答えた学生が約50%もいることから、今後は実習体験などを適時入れることで動きのある授業とするとともに、教科書以外から話題を紹介するなど、身近な学問として

位置付けたいと考えている。

総合評価で「講師の熱意が感じられた」という割合が「出席してよかった」とほぼ同じであったことは、教師の熱意が授業の出席価値に大きな影響を及ぼすことを再認識した。「価値があり、知的刺激を受けた」とした学生が90%前後見られたことは、講義の進め方いくつかの問題点はあるものの聴講ノート方式そのものは良い教育方法と容認されたものと解釈している。

何か一つのことをやり終えた時、達成感、新たな発見、満足感(充実感)などが得られる。この講義において約30%の学生がはっきりと気持ちに張りを感じ、これに肯定的な答えを加えると80%近い学生が「充実した内容の教育であった」と思ったことになる。これに関することは学生の自由記述にも多く見られ、講義という受身の立場で聴講ノートを書くことで能動的になれ、主体性のある学習ができたと述べている。Dr.ハーストの「講義が成功するか否かは、講師の人格にかかっている。講義の価値は、講師の人格そのものといえる。その講師が、知識を追求する人物であり、いろいろなことに疑問を持ち、新しいことに驚嘆する感覚を持ち、学生と交わることを楽しみ、彼らに努力の大切さを知らしめるよう導くような人物であるということが、おのずと示されるかが問題なのである。講師が何らかの興奮をもたらすことがないとすれば、その講義は失敗に終わる」³⁾という言葉は講義の神髄である。

著者らは、より良い授業をしたいと十数年前から授業に対する学生の声を聞いてきた。それは「今日の授業は良かった」と学生諸君に思ってもらいたいがためである。当初は手作りアンケートで見よう見まねで行ってきたが、今回の結果からこれまでの教育的な試行錯誤に大きな誤りがなかったことを確信した。

聴講ノート方式に対する学生による授業評価がいかに高くても学業成績が向上しなければこの企画を続けることはできない。そこで通常講義と聴講ノート方式での試験の成績を比較検討した。その結果、聴講ノート方式では通常講義の時に比べて39点以下の低得点者の割合は約半分で、80点以上の高得点者は約2倍であった。成績の悪い人が少なくなり、よい成績の人が多くなったのである。このことから聴講ノート方式は言葉を記憶し、理解する方法として有用であることが分かった。

今回、聴講ノート方式による教育効果だけでなく、どのような講義が良いと言えるのかを模索するため1995年以來行ってきた医動物学における教育方法をあわせて検討した。1つは通常の講義は行わず、講義時間の

大半は自習させ、最後の30分で要点を概説するという方法、そして通常の講義はせず、指定されたテーマに関してグループで学習し、まとめの原稿を作成、学生の前で学生自身が解説（口頭発表）するというシンポジウム方式^{4),5)}である。要点概説方式およびシンポジウム方式を通常講義の成績と比較検討したところ40点以下の低得点者の割合が最も多かったのは要点概説方式で、次いでシンポジウム方式、最も少なかったのは通常講義であった。やはり初心者に対して自己学習と要点を概説するだけの要点概説方式では、基礎的事項を身につけさせることは難しいという結果であった。80点以上の高得点者の割合は通常講義が最も多く、次いでシンポジウム方式、最も少なかったのは要点概説方式でその割合は1.9%と通常講義の5分の1という小ささであった。通常講義は低得点者が少なく、高得点者が多いという最良の結果であった。49点以下の学生は通常講義で最も少なく、次いで要点概説方式であった。シンポジウム方式では28.6%の学生が49点以下の得点で余り芳しくなかった。この結果を受けて現在、シンポジウム方式に基礎的知識を深めるための講義の導入を計画中である。60点以上の学生の割合は、通常講義が最も多く、次いで要点概説方式で、やはりシンポジウム方式が最も少ないという結果となった。通常講義では50点から69点の範囲にピークがあった。それに対してシンポジウム方式では得点ピークが40点から49点と60点から69点の2つにあったことは、この方式は他と比べて自由度が高いため学生個人によって学習密度に差が出ることや指定学習の興味度、学ぶ方向性が噛み合わなかったことによるものと考えている。要点概説方式では50点から79点までの範囲に台形状の分布が見られ、中間的な得点の人が多かった。通常講義では50点以上の学生が約90%、要点概説方式では約80%であった。このことは講義時間が短くても知るべきこと、学習すべき項目を的確に伝えれば事細かに講義しなくてもある程度の成績を得ることができることを意味している。ただ、要点概説方式では49点以下の低得点者が約20%もみられ、学習意欲が低い、あるいは学習のポイントが分からない学生にとっては自己学習は難しいことが考えられる。

今後の聴講ノート方式では学生の集中力を考えて30分講義し、休憩10分、再び講義を30分行い、最後にまとめを10分とる時間配分を考えている。そしてシラバス以外にその日のより詳しい講義指針（小項目）を事前に示すことで学生は講義内容をより確実に把握し、

聴講が円滑に進むようにしたいと考えている。黒板も適時活用し、分かりにくい言葉などは板書するように努めたい。さらに授業計画のなかに実習を入れ、知識の定着を図りたいと思っている。

聴講ノート方式では低得点者数の割合が減少し、高得点者は増加するという望ましい結果となり、しかもこの教育方法をほぼ全員の学生が容認している。シンポジウム方式の講義をしないで自己学習を主体とする方法では、初めての学問で基本的な知識を身につけることは難しいことから、要点概説方式のように30分程度の講義を入れることを考えなくてはならない。シンポジウム方式では低得点者の割合が多く、高得点者が少ないという結果であったが、これは試験問題が記憶の有無を確かめるものでシンポジウム方式の教育目標と異なっていたことによると考えている。

学校教育では、知識量を問うのではなく、知識をどのように使いこなすかを教えることが大切である。それにはまず「考えるための素材」としてきちんとした知識を身に付けることが必要である。今回検討した聴講ノート方式は、基本的な知識を身に付ける方法として有用なことが分かった。しかし、もっと大切なのは、習得した知識をもとに論理的に思考し、それを自分の意見として文章にまとめ、他人に伝える能力を磨くことである。いわゆる説明能力を鍛えることが大切なのである。そこでこれからの教育は知識を使いこなす発展させる形、いわゆる討論形式の授業を教育の中にどのように組み込むかが工夫されなければならない。自己学習促進とプレゼンテーション能力開発を目指すシンポジウム方式と、「考えるための素材」となる知識が確実に身につく聴講ノート方式を適切に組み合わせた方法はこれからの教育方法の一つとして発展させるに値するものと考えている。

文 献

- 1) 梶田 毅一：新しい大学教育を創る 全入時代の大学とは、東京：有斐閣選書，pp. 64-77, 2000.
- 2) 日本医学教育学会：医学教育マニュアル3 教授—学習方法，東京：篠原出版，pp. 27-30, 1982.
- 3) 日野原重明・稲垣義明 監訳：Dr. ハーストの医学教育論—The Bench and Me—，東京：医学書院，pp. 21-32, 1993.
- 4) 下田健治，車 圭子：シンポジウム形式による学習法の導入I—教育計画の概要とその評価—，川崎医療短期大学紀要20：41-48, 2000.
- 5) 下田健治，車 圭子：シンポジウム形式による学習法の導入II—シンポジウムの実際とその評価—，川崎医療短期大学紀要20：49-56, 2000.

